

現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について

岡 田 努¹

現代の青年に特有の友人関係、自己意識、現代青年の特質に関する項目について、大学生に対する調査を行った。友人関係の尺度に関しては、以下の3つの示標が用いられた。1) 青年自身が現在取っていると考える関わり方(現実自己評定)、2) 理想として取りたい関わり方(理想自己評定)、3) 自分の友人が取っているであろう関わり方(友人評定)である。また、他の尺度については、現実自己評定と友人評定が用いられた。その結果、友人関係尺度の「表面的・内面的関係」及び「群れ」下位尺度において理想自己評定が現実自己及び友人評定よりも高かった。また「表面的・内面的関係」下位尺度では、自己意識上位群では、現実自己評定と理想自己評定の間にのみ相関関係が見られ、自己意識下位群では、現実自己評定と友人評定の間にも相関が見られた。また自己意識に関しては、自分自身よりも友人の方が低く、現代青年の特質に関する項目では「積極性」「親依存性」の下位尺度に関して、現実自己評定の方が低い得点を示していた。この結果から、青年自身は、現代の青年に特有とされる特質については、自分自身よりも友人によりあてはまると認知していることが見出された。

キーワード：現代青年、友人関係、自己意識

問 題

1 伝統的青年観

青年期は、自分自身に対する関心(内省)が高まるとともに、人格的共鳴や同一視をもたらすような深い友人関係を持つことを通して、新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進される時期であるとされてきた(西平, 1973; 1990 など)。すなわち、児童期までの遊び仲間との関係が、活動や物品の共有などを中心とした関わり方であるのに対し、青年期には、内的体験の共有や、友人に対する忠誠や親密性を中心とした関係に変化することが見出されている(デーモン, 1990)。一方、自己概念に関しても、青年期には、身体的属性などの外的な属性よりも、対人能力や性格、情緒など自己の内面的な属性に関心が向くことが指摘されている(Damon & Hart, 1982; Rosenberg, 1986, 加藤, 1987 など)。また、岡田(1987)は、中学生から高校生にかけての同性の親友像が青年の自己像のモデルとなること、またその後、大学生年代において、現実自己像と理想自己像の比較によって自己を評価するようになることなどを見出した。このように親密な友人関係と青年期における自己概念の間には密接な関わりがあることが指摘されてきている。

以上のように自己に対する内省の高まりと、同性の親しい友人との親密な関わりが、これまで、青年期の

特徴として記述されてきた。本研究ではこれを「伝統的青年観」と称する。

2 現代の青年の特質

しかし、この伝統的青年観に対して、現代の青年の友人関係の特質として、内面的な関わりを避け表面的な楽しさを追い求める傾向がしばしば指摘されている(岡田, 1995 など)。また自己に対する関心の低下(岡田, 1993; 西平, 1988)、親からの自立に消極的、マニュアル人間、指示待ち人間(千石, 1985)などが、現代の大学生世代の青年の特徴として指摘されている。上野・上瀬・松井・福富(1994)は、心理的距離と同調性の軸から表面的、個別的、密着的、独立的の4パターンの交友関係を見出した。岡田(1995)は大学生の友人関係の特徴として、互いに傷つけあわぬよう気を遣う・互いの領域に踏み込まぬよう、関係の深まりを回避する・楽しさを追求し群れる、といった3側面を見出した。

一方、高垣(1988)は、現代の青年の友人関係について、個々の青年自身は友人との親密で内面を開示するような関わりを求めているにもかかわらず、もしこれを実際に友人に求めるならば、茶化されたり馬鹿にされたりしてしまうという恐れを持ち、結果的に関わりを避けて自分をさらけ出さなくなると論じている。また、一般に考えられている現代青年のイメージについても、友人についてはあてはまるものの、自分自身についてはあてはまらないという認知をしていると指摘している。すなわち、現代の青年に特有とされる特質

¹ 立教大学

は、青年が周囲に対する認知に自分を合わせることで生じたものであり、青年自身は、むしろ伝統的青年観に近い意識をもっていることが示唆される。しかしこうした指摘は青年の聞き取り調査に基づいたものであり、実証的な検証はこれまでなされていない。よって、実際に青年及び青年の友人に対する認知において、こうした指摘に合致する現象が見られるか否かを実証的に検証することが、本研究の目的である。

すなわち、青年自身は友人との間で親密で内面を開示するような関わり（本研究ではこれを「内面的関係」と称する）を自己の理想としては求めているが、友人はそうした関係を取ってはいないと認知し、現実には内面的関わりを避けている（本研究ではこれを「表面的関係」と称する）という現象が実際に見られるか否かについて、実証的に検証する。

特に、他者から自分がどのように見られているかについて注意が向きやすい者は、他者と自己を比較参照する傾向が高いため、自己と他者を共通した枠組みで見る傾向が高くなり、自他認知間の相関が高くなるものと考えられる（自己認知の枠組みを他者認知に対しても用いることが、両者の相関関係を指標として言えるということは遠藤(1993)；岡田(1995)などにおいて詳細に検討されている）。Fenigstein, Scheier & Buss (1975) は、自分自身について意識が向きやすい性格傾向として自己意識特性という性格特性を挙げている。このうち、自分自身の内面に注意の向きやすい側面を“私的自己意識”，他者の目に映る自分自身に注意が向きやすい側面を“公的自己意識”としている。上に述べた「他者からどのように見られているかについて注意が向きやすい」者は、公的自己意識が高い者と考えることができる。さらに、上野ら(1994)は、同調性の高い交友関係を取る青年は、公的自己意識が高く、友人からの評価懸念が高いことを見出している。「友人が取っていると認知する友人関係に自分を合わせ、表面的関係を取る」ということは、同調的な友人関係の1つであると考えられるため、公的自己意識の高い青年ほど、内面的友人関係を取る／取らないについて、友人に対する認知と青年自身に対する認知が類似する傾向が高いだろう。すなわち、公的自己意識の高い青年は、低い青年に比べ、内面的友人関係の取り方について青年自身と友人に対する認知の間で高い相関関係が見られるものと考えられる。

さらに、高垣(1988)の指摘に基づけば、友人関係以外にも、一般に考えられている現代青年の特質に関しても、友人の方がよりそれらの諸特質を有していると認知していると考えることができる。すでに述べたよ

うに、現代の青年の特質の1つに内省的傾向が低いことが指摘されている（岡田, 1993；西平, 1988），内省的傾向は、自己の内面に意識が向く傾向であり、私的自己意識に反映されるものと考えられる。よって、青年が自分自身よりも友人の方がより現代的な特質を有していると認知しているならば、私的自己意識についての青年自身の自己評価は、友人に対する評価（友人がどのような自己意識を持っているかについての評価）よりも高い得点を示すだろう。

この他、現代の青年の特質については、上述のように様々な行動や意識の特質が指摘されている。しかし、こうした諸特質については、これまでその構造が明らかにされていないため、本研究では、これらの特質の構造を明らかにした上で、これについても、青年自身の認知と友人に対する認知を比較する。

以上をふまえ、以下の仮説について検討を行った。
仮説1 青年自身は、友人関係において内面的関係を求めているが、友人は逆に表面的な関係を取っているとみなしているだろう。また現代青年に特有な、楽しさを追求して群れる関わり方についても、同様に青年自身の希望ではなく、友人が取っている関わり方と見なしているだろう。よって、青年が理想として求める友人関係に比べ、友人が取っていると認知する関係の方が、表面的で群れる傾向が高く評価されるだろう。また、青年が現実を取っていると認知する関係と、友人に対する認知とは、表面的関係や群れる傾向について、同程度に評価されるだろう。

仮説2 公的自己意識の高い者は、低い者に比べ、内面的関係に関して、自己評価と友人に対する評価の間で高い相関関係が見られるだろう。

仮説3 現代青年の特質として記述されている諸特質については、青年自身よりも、むしろ自分の友人の特性であると認知しているだろう。よって自己の内面に対する関心の度合いである私的自己意識に関して、自己評価は、友人に対する評価よりも高いだろう。また、その他、現代青年に特有とされる諸特質に関する項目については、自己評価よりも友人に対する評価の方が高いだろう。

方 法

調査対象

新潟県内の大学生。主に1，2年次を対象に教養課程の講義時間内に質問紙調査を実施。

実施時期 1994年1月。

有効回答数 男子118名，女子123名，不明1名の合

計242名。

調査項目

(1)友人関係尺度 岡田(1995)が作成した。現代青年に特徴的な友人関係に関する項目を補足修正した23項目について、a)普段つきあっている仲間のうちでも最も親しい友達に対する評定(以下「友人評定」と記す)、b)自分自身に対する評定(現実自己評定)、c)自分がどの程度「やりたい」と思うか(理想自己評定)に関して評定を求めた。(得点が高い程、各特徴が高いと考えられる)。

(2)現代青年の特質に関する項目(以下「現代青年項目」と記す) 現代の青年に特徴的とされる言動や親子関係の特徴について中野(1991)、詫摩・菅原・菅原(1989)、千石(1985)などを参考に以下の観点から40項目を作成し、友人評定及び現実自己評定を求めた(得点が高い程、各特徴が高いと考えられる)。

項目作成に当たって参考としたものは以下の観点である。

マニュアル人間、現実的、自分の立場をハッキリ示さない、マナーがない、年長者との関係でものおじしな、指示待ち人間、消極的、ゲーム感覚、快楽主義、感覚主義、衝動統制がない、親からの自立不全、私生活主義、現状肯定。

(3)自己意識尺度 菅原(1984)が邦訳した自己意識尺度21項目について、友人評定及び現実自己評定を求めた。友人評定については、友達がその人自身をどう感じていると思うかについて、その人自身になったつもりで回答を求めた。

評定はすべて6件法で行われ、友人評定、現実自己評定、理想自己評定はそれぞれ以下のような指示によって行われた。

友人評定：あなたが普段つき合っている仲間のなかで最も仲の良い友達を1人想定して下さい。以下の項目内容が、どの程度その人にあてはまるかを、各項目1箇所○印をつけて下さい。項目に出てくるような場面を見たことがない、或いは分からないという場合でも、「その人ならどうするだろう・どう思うだろうか」という推測で回答して下さい。

全くあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(6点)
現実自己評定：以下の項目内容がどの程度あなた自身について「あてはまるか」を、同じように、各項目1箇所ずつに○印をつけて下さい。

全くあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(6点)
理想自己評定：以下の項目で示される行動をあなたはどの程度「やりたい」と思いますか? 「やりたい」と思う程度に各項目ごと1箇所○をつけて下さい。

全くやりたくない(1点)～非常にやりたい(6点)
各尺度の得点の範囲はTABLE 3に記載する。

結 果

1 尺度の分析

(1)友人関係尺度 本尺度は尺度全体として「青年の友人関係の取り方」という特性を測定していることが仮定されている。そこで、まず主成分分析によって第I主成分に高い主成分負荷量を持つ項目のみを採択した後、因子分析によって、さらに項目を分類した。まず現実自己評定、理想自己評定、友人評定をそれぞれ別個のケースの回答とみなし、回答者人数×3のケース数による主成分分析を行った。次に第I主成分に絶対値.3以上の主成分負荷量を持つ項目のみについて、主因子法による因子分析を行った。Varimax回転後単一の因子について絶対値で.4以上の因子負荷量を持つ項

TABLE 1 友人関係尺度の因子パターン(Varimax回転後)及び採択項目の α 係数

	I 内面的 関係	II 群れ	III 気遣い	
	α 係数			
現実自己評定	.837	.764	.571	
理想自己評定	.794	.711	.610	
友人評定	.771	.760	.683	
項目	因子パターン			共通性
6 友達に心を打ち明ける	.799	.136	.203	.699
23 友達に悩みごとを相談する	.728	.139	.209	.593
2 友達と真剣な議論をする	.657	.053	.167	.463
14 友達とは、あたりさわりのない会話が中心だ	-.549	-.037	-.037	.303
8 友達関係は浅い付き合いにとどめる	-.562	.025	-.174	.347
1 必要に応じて友達に頼る	.359	.219	.031	.177
7 ウケるようなことをする	.185	.720	-.044	.555
17 友達に冗談を言って笑わせる	.213	.703	-.002	.539
18 仲間と一緒にいることが多い	.150	.582	.147	.382
19 1人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする	-.051	.555	.101	.321
20 仲間から「つまらない人間」と思われないうちに気をつける	-.059	.455	.229	.263
10 仲間といるとき、楽しい雰囲気になるよう気をつかう	.137	.474	.425	.424
4 友達の考えていることに気をつかう	.164	.225	.565	.397
9 仲間関係の中で互いに傷つけないよう気をつかう	-.054	.152	.526	.303
5 仲間のためにならないことは決してしない	.162	.004	.492	.269
12 自分を犠牲にしても友達につくす	.277	.089	.477	.313
15 友達との約束は決して破らない	.159	-.003	.429	.209
説 明 率	2.632	2.262	1.662	

目について解釈を行い「表面的-内面的関係」「群れ」「気遣い」の3因子を得た。これは岡田(1995)において見出された因子とほぼ共通するものである。ただし、本研究での「表面的-内面的関係」因子に相当する因子は、岡田(1995)では「関係回避」因子と命名され、本研究とは逆の得点の方向性を持ち、得点が高い者ほど現代青年の特徴的な友人関係を示すものとされていた。本研究における「表面的-内面的関係」因子は、得点が高い者ほど伝統的青年観である内面的関係を取ると考えられる。

各因子を反映するものとして採択された項目を用いて、各因子ごとに評定別の Cronbach の α 係数を求めた。その結果、「表面的-内面的関係」「群れ」の各因子では $\alpha = .711 \sim .837$ と十分な信頼性が得られたが、「気遣い」因子については、理想自己評定で $\alpha = .571$ と低い信頼性であったため、本研究では参考として表示するにとどめる (TABLE 1)。

(2)現代青年項目 友人関係尺度同様に現実自己評定、友人評定をそれぞれ別個のケースの回答と見なして、回答者人数 $\times 2$ のケース数による主因子法による因子分析を行い、4 因子を抽出し、Varimax 回転を行った。絶対値で .4 以上の因子負荷量を持つ項目について解釈を行い、第 I 因子は「積極性」、第 II 因子は「軽薄性」、第 III 因子は「親依存性」と命名された。各因子を反映するものとして採択された項目を用いて、各因子ごとに評定別の Cronbach の α 係数を求めた。その結果、第 I ~ 第 III 因子では .699 ~ .860 でほぼ十分な信頼性が得られた。なお第 IV 因子については、.4 以上の因子負荷量を持つ項目が 3 項目のみであり、また α 係数も .505 ~ .515 と不十分なため検討の対象からは除外した (TABLE 2)。

2 友人関係に関する認知について

それぞれの評定尺度について、採択された項目について、各因子ごとの合成得点を求めた。これらの平均値と標準偏差を TABLE 3 に示す。現実自己、理想自己、友人評定間での平均値の差を検討するため、対応のある一元配置分散分析を行った。その結果「表面的-内面的関係」では $F(2,464) = 40.41$ 、「群れ関係」因子で $F(2,476) = 46.44$ 、「気遣い」因子で $F(2,466) = 67.39$ でいずれも $p < .01$ で有意な差が見られた。Newman-Keuls の多重比較の結果、「表面的-内面的関係」因子については理想自己評定が最も高く、現実自己と友人評定の間には有意な差が見られなかった。他の因子では得点の低い側から順に友人、現実自己、理想自己評定の順となっていた (TABLE 3)。

TABLE 2 現代青年項目の因子パターン (Varimax 後) 及び採択項目の α 係数

	I 積極性	II 軽薄性	III 親依存性	IV 不採択	
α 係数					
現実自己評定	.860	.712	.699	.515	
友人評定	.851	.780	.761	.504	
項目	因子パターン				共通性
24 積極的に自分から進んで行動する	.721	-.158	-.158	-.046	.572
33 話題が豊富である	.697	.021	.038	-.146	.509
17 他人に対してものおじしない	.681	.057	-.053	-.113	.482
30 自分の意見をハッキリ言う	.606	-.061	-.179	-.146	.424
14 目上の人とでも打ち解けやすい	.587	-.083	.055	-.050	.357
28 いつも気分が高揚している	.578	.105	.108	.095	.366
37 ユーモアのセンスがよい	.577	.065	.079	-.097	.353
10 人間関係をツツなくこなす	.531	-.047	.219	.019	.332
21 目立ちたがりである	.477	.113	.030	.373	.380
27 楽しい気分になるよう心掛けている	.472	.006	.109	.172	.265
8 やりたいことはすぐやらないと気が済まない	.422	-.060	-.108	.203	.234
4 感性がすぐれている	.418	-.113	-.001	-.013	.188
13 マニュアルが無いと行動できない	-.420	.240	.365	.323	.471
19 人から指示されないと行動しない	-.515	.225	.318	.346	.536
34 イヤなことはすぐ忘れてしまう	.316	.312	-.006	.006	.197
35 理屈よりも感性でものごとを判断する	.311	.182	.033	.208	.174
11 今の生活に不満はない	.294	.000	.281	-.181	.198
20 物事を深刻に考えない	.143	.521	.089	.049	.302
29 無理な努力はあえてしない	-.135	.491	.012	.047	.262
32 面白いことにだけ手を出す	.062	.485	-.077	.358	.373
22 表面的な楽しさばかり求めている	.015	.475	.000	.470	.447
23 ゲーム感覚で生きている	.238	.461	.006	.337	.382
25 イヤなことはなるべく考えない	.137	.410	.078	.202	.234
26 苦労や努力を惜しまない	.313	-.469	.062	-.074	.328
15 政治問題に関心がある	.131	-.557	-.123	.201	.383
6 社会問題に関心がある	.159	-.602	-.119	.153	.425
3 自分の生き方などを真剣に考えるのは格好悪いと思っている	-.050	.378	.108	.116	.170
7 目上の人か、同じ年代の人かによって言葉遣いを変える	-.065	-.367	.042	.326	.247
16 目上の人に対して気を使う	.067	-.379	.137	.312	.264
38 親と仲が良い	.238	-.074	.576	-.049	.396
18 精神的に親を頼りにしている	-.093	.040	.573	.116	.352
5 親の言うことを聞いていれば間違えはないと思っている	-.110	.098	.566	.124	.357
1 困ったことがあると親に解決してもらう	-.163	.151	.552	.166	.382
40 親には何でも打ち明ける	.207	-.050	.530	-.145	.348
12 親に反抗しない	.114	.108	.433	-.146	.234
39 仲間外れにされることを恐れている	-.183	.012	.179	.499	.315
2 仲間と一緒に行動しないと不安である	-.220	.132	.292	.452	.356
9 恋愛など身の回りの問題で頭が一杯である	.064	-.037	.030	.424	.186
31 腹が立つと すぐ暴力をふるう	-.022	.071	-.187	.350	.163
36 怒りだすと止まらない	.007	.038	-.202	.313	.140
説明率	5.172	3.071	2.502	2.338	

TABLE 3 友人像と現実自己像の差異（上段：平均値
下段：標準偏差）及び友人関係尺度間の比較（欠
損値を含むケースを除外して n を統一してある）
得点範囲欄の（ ）内は中心位置の得点

	友人	現実自己	理想自己	F/(自由度)	多重比較
[友人関係尺度]					
内面的関係	21.36	20.97	22.03	40.41**	R=F<I
n=233	3.84	4.18	3.90	(2,464)	
得点範囲5-30(17)					
群れ	19.80	20.40	21.31	16.44**	F<R<I
n=239	4.23	3.75	3.70	(2,476)	
得点範囲5-30(17)					
気遣い	18.99	20.09	21.84	67.39**	F<R<I
n=234	3.45	2.88	3.54	(2,466)	
得点範囲5-30(17)					
	友人	自己評定	t/(自由度)	友人・自己評定間相関	
[自己意識尺度]					
公的自己意識	40.77	46.95	10.77**F<R	.38**	
n=238	8.36	7.48	(237)		
得点範囲11-66(38)					
私的自己意識	39.64	44.81	10.11**F<R	.35**	
n=237	6.99	6.85	(236)		
得点範囲10-60(34.5)					
[現代青年項目]					
積極性	56.58	52.29	5.50**F>R	.16*	
n=240	9.20	9.44	(239)		
得点範囲14-84(48.5)					
軽薄性	28.35	27.88	0.95	.22**	
n=241	6.32	5.81	(240)		
得点範囲9-54(31)					
親依存性	19.34	18.60	2.06*F>R	.27**	
n=239	4.68	4.48	(238)		
得点範囲6-36(20.5)					

註：R：real self I：ideal self F：friend

*： $p<.05$, **： $p<.01$

3 自己意識特性との関連

公的・私的自己意識得点についてそれぞれ第1四分位得点以下の者を下位群，第3四分位得点以上の者を上位群とし各評定間の積率相関係数を求めた。また現実自己－友人評定間の相関については「理想化傾向」（梶田，1980）²の影響を除外するために，Blalockの因果分析（安田・海野，1977）を用いて理想自己評定を統制変数とする偏相関係数を求め用いた。

その結果，「表面的－内面的関係」因子においては，

² 現実自己認知と他者認知の相関の高さは，両者の実際の類似性（assumed similarity）に基づくものだけではなく，現実自己像と理想自己像の間の相関の高さに影響された「理想化傾向」による可能性が指摘されている（梶田，1980；今川，1985）。理想化傾向の影響を受けない現実自己像－他者像間の類似性を知るためには，理想自己像を統制した現実自己像－他者像間の偏相関係数を求める必要がある。

公的・私的自己意識ともに，上位群では現実自己と理想自己の間に，また下位群では現実自己，理想自己，友人各評定間でそれぞれ.4以上の比較的大きい相関（偏相関）が見られた。上位群と下位群の間に相関係数の大きさを比較するため，相関係数を z' 変換した後，積率相関係数については χ^2 値を求め，偏相関係数については臨界比（CR）を求め，それぞれ有意性検定を行った。その結果，「表面的－内面的関係」では，公的自己意識については，理想自己－友人間相関で， $\chi^2(1, N=75, 68)=14.01$ ($p<.01$)，現実自己－友人間相関で $CR(1)=1.99$ ($p<.05$) で，下位群の方が大きな相関係数を持っていた。また私的自己意識については，現実－理想自己相関で $\chi^2(1, N=75, 68)=5.03$ ($p<.05$) で，上位群の方が有意に大きな相関が見られた。

「群れ関係」因子では，公的自己意識については，上位群では現実自己－理想自己の間に $r=.573$ と比較的大きな相関関係が見られ，下位群では現実自己－理想自己評定間で $r=.414$ ，理想自己－友人間では $r=.405$ と比較的大きな相関が見られ，現実自己－友人評定間でも $rp=.346$ の緩やかな偏相関係数が見られた。私的自己意識については，上位群では現実自己－理想自己の間に $r=.586$ と比較的大きな相関関係が見られ，現実自己－友人評定間でも $rp=.308$ の緩やかな偏相関係数が見られた。下位群では現実自己－理想自己評定間で $r=.456$ ，理想自己－友人間では $r=.499$ と比較的大きな相関が見られた。

「気遣い関係」因子では，上位群で現実自己－友人間で $rp=.430$ ，下位群では現実自己－理想自己間で $r=.560$ と比較的大きい相関（偏相関）が見られた。

4 自己意識尺度及び現代青年項目の自己評定と友人評定について

自己意識尺度及び現代青年項目について，現実自己評定と友人評定の平均値について対応のある t 検定による比較を行ったところ以下の通りとなった。

自己意識尺度については，公的自己意識で $t(237)=10.77$ ，私的自己意識で $t(236)=10.11$ でいずれも $p<.01$ で自己評定が友人評定に比べ高かった（TABLE 3）。自己意識尺度得点の有意差については，自己の内面に関する評定に比べ，他者の内面についての推定が困難なために生じた差である可能性がある。よって逆転項目とその他の項目での平均値を検討するため，項目ごとでの平均を求めた（TABLE 4）。その結果，逆転項目では，他の項目と異なり友人評定の方が「あてはまる」方向に評定されていたことから，自己評定と友人評定の平均値の差は，項目の内容そのものに対する評定の差で

TABLE 4 自己意識尺度の項目ごとの平均値

	友人評定	現実自己 評定
[公的自己意識]		
自分が他人にどうおもわれているのか気になる	3.83	4.44
*世間体など気にならない	3.18	2.95
人に会う時、どんなふうふるまえば良いのか気になる	3.75	4.36
自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる	3.86	4.65
人に見られていると、つかっこうをつけてしまう	3.21	3.82
自分の容姿を気にするほうだ	3.69	4.17
自分についてのうわさに関心がある	3.88	4.41
人前で何かする時、自分のしぐさや姿が気になる	3.53	4.24
他人からの評価を考えながら行動する	3.48	4.16
初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう	4.02	4.45
人の目に映る自分の姿に心を配る	3.73	4.26
[私的自己意識]		
自分がどんな人間なのか自覚しようとしている	4.12	4.67
その時々気持ちの動きを自分自身でつかんでいたい	3.86	4.54
*自分自身の内面のことには、あまり関心がない	2.59	2.21
自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する	4.09	4.29
ふと一歩離れた所から自分をながめてみることがある	3.73	4.34
自分を反省してみることが多い	4.01	4.58
他人を見るように自分をながめてみることがある	3.63	4.28
しばしば、自分の心を理解しようとする	3.92	4.59
つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	3.82	4.27
気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ	4.07	4.45

註) 逆転項目 (*印) についても評定素点に基づいた逆転前の平均値を示した

あると見なした。

現代青年項目については、積極性で $t(239)=5.50$ ($p<.01$)、親依存性で $t(238)=2.06$ ($p<.05$) と友人評定の方が自己評定よりも高かった。また軽薄性については有意な差は見られなかった。親依存性については自己評定、友人評定とも取りうる得点範囲の中心位置より小さかった(「あてはまらない」方向での評定)。積極性については逆に自己評定、友人評定ともに「あてはまる」方向での評定であった (TABLE 3)。

考 察

1 友人関係の認知について

「表面的一内面的関係」因子においては、現実自己評定と友人評定の間には有意な差が見られず、理想自己評定のみが内面的な方向で有意に高く、仮説1に合致した結果となった。このことから、青年自身は、友人以上に自分の理想として内面的関係を求めていると認知しており、表面的な関わり方を肯定しているわけではないことが明らかとなった。

一方「群れ」因子においては、友人評定、現実自己、

理想自己評定の順で高い評定となっており、仮説1に反する結果となった。すなわち、群れ関係は青年にとって理想となる関わり方であり、さらに現実においても、友人以上にこうした関係を取っていると認知している。言い換えれば、自分の理想に反して友人に合わせるのではなく、むしろ積極的に群れ関係を取ろうとしていると言えることができる。

以上の結果から、“現代青年の友人関係は、群れているだけで、関係の深まりを求めない”とするこれまでの指摘とは異なり、青年は、内面的関係と群れ関係を共に理想として肯定的にとらえていることが明らかとなった。

尚、「気遣い」因子については、「結果」の項で述べたように十分な信頼性係数が得られなかったため、考察は差し控えたい。

2 自己意識特性と友人関係に関する認知

公的自己意識の上位群、下位群間での友人関係認知の比較に関しては、仮説とは逆の結果となった。すなわち、「表面的一内面的関係」因子においては、公的自己意識上位群では現実自己と理想自己の評定間に.5以上の比較的高い相関関係が見られ、下位群では各評定間に.5以上の高い相関関係が見られた。また理想自己一友人像及び現実自己一友人像において下位群の方が有意に大きな相関係数が見られた。また群れ因子においても、公的自己意識上位群では現実自己一理想自己間でのみ.5以上の高い相関関係が見られ、下位群では各評定間で.3～.4の相関関係が見られた。

一方、私的自己意識においては、公的自己意識とは異なり、上位群・下位群ともに現実自己一理想自己、現実自己一友人評定間に.3以上の相関関係が見られた。

このことは次のように考えることができる。自己を客体的に観察する傾向である自己意識のうち、特に、公的自己意識の高い者は、自己の外的側面に注目し、他者の視点から自己をとらえる傾向が高く、自他の相異を意識しやすいために、友人評定と自己評定の間の相関が低くなったものと考えられる。一方、公的自己意識の低い者については、自他のイメージが未分化であり、自己像と友人評定の相関が高くなったものと考えられる。

一方、私的自己意識の上位群と下位群の間では、公的自己意識のような明確な違いは見出されなかった。これは、友人関係という外的に観察可能な事象についての認知は、自己の内面に対する関心の度合いである私的自己意識の高低とは、密接には関わらないためと考えられる。

青年期における自己概念の発達の一つとして、役割取得によって他者の立場から自分自身をとらえることが可能になる点が指摘されている(柏木, 1983; Rosenberg, 1986)。また宮下(1995)は青年期の友人の意義のひとつとして、友人関係を通して自分の長所短所に気付き、自己を客観的に見つめることを挙げている。以上のことから、自己を客観的にとらえる過程で、他者の観点から自己を見る際の比較対象として友人関係が機能するものと考えられる。これは、理想自己像のモデルないしは同一化の対象としての友人像(岡田, 1987)とは異なり、現実自己像をより明確化させる働きをもつものと考えられる。言い換えれば、友人との比較によって自己を客観的にとらえることは、自他の相違をより明確に自覚することになり、両者の相関がより小さくなったものと考えられる。

柏木(1983)は、自己概念の発達として、まず自分自身の内的状態への自覚としての「現実の自己(私的自己)」があり、これに続いて他者の視点から自分を見る「他者における自己概念(公的自己)」が発達し、最後に理想自己が発達することによって、現実自己と理想自己の照応が可能となるとしている。このことから考えると、公的自己意識の高い群は発達のにより高い段階の特徴を有する可能性も考えられるが、この点に関しては年代間での比較など発達の検討が必要となろう。

3 現代青年の内省及びその他の特質に関する認知

私的自己意識特性の得点から、青年が友人に対するよりも自分自身に対して、より内省的であると見なしされており、仮説3が支持された。

また現代青年項目においては、「親依存性」及び「積極性」において、仮説3の通り、友人評定が現実自己評定よりも高かった。しかし、「親依存性」の平均値は取りうる得点範囲の中での中心位置よりも「あてはまらない」方向の位置であり、また「積極性」は「あてはまる」位置にあった。すなわち、親に依存的であるといった否定的内容ではより「あてはまらない」方向で、また積極性のような肯定的内容はより「あてはまる」方向で現実自己、友人評定ともに回答していたことになる。すなわち、現代青年の特質のうち否定的な側面だけでなく、肯定的側面も含めて「友人には該当しても自分には該当しない」と認知されていることが明らかとなった。

一方、友人関係尺度においては、現実自己像と友人像の間では、「群れ」因子では現実自己の方が有意に高く、「表面的-内面的関係」においても有意ではないものの、友人像の方が高い結果となった。すなわち、友

人よりも現実の自分自身の方が、現代の青年に特徴的な友人関係を取っていると認知されており、私的自己意識及び現代青年項目での結果とは逆の方向となった。これは、青年自身が、友人関係を維持するために、友人が取っている関係の取り方に過剰適応的に合わせようとしている可能性が推測されるが、今後さらに詳細な検討が必要と考えられる。

4 全体的考察

以上のように、現代青年項目における「現代青年の特質」の諸側面に関しては、青年は、自分自身以上に友人の中に、それらの特質をより顕著に見出していると言えよう。たしかに自己評定、友人評定ともに得点の中心位置との関係では、より「あてはまる」方向に評点されているが、自分自身と友人との相対的關係においては、青年自身は、伝統的・青年観に近い自己認知を持っていると言うことができよう。

また、友人関係において、内面的関係を求める点で、伝統的・青年観に近い友人関係を求めているながら、現実には友人認知に近い、伝統的・青年観とは異なる関わり方をしていること、特に、公的自己意識の低い者において、友人認知と青年自身の現実自己認知が関連を持つことなどが明らかとなった。このように、現代の青年に特有とされるような友人関係を取っている青年自身が、必ずしも自分の対人関係のあり方に満足している訳ではないという可能性が示唆された。

引用文献

- Damon, W., & Hart, D. 1982 The development of self-understanding from infancy through adolescence. *Child Development*, **53**, 841-864.
- デーモン W. 1990 山本多喜司(編訳) 社会性と人格の発達心理学 北大路書房 (Damon, W. 1983 *Social and personality development*. Norton.)
- 遠藤由美 1993 自他認知における理想自己の効果 心理学研究, **64**, 271-278.
- Fenigstein, A, Scheier, M.F., & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- 今川民雄 1985 好ましい他者の価値態度の認知 実験社会心理学研究, **25**, 1-6.
- 梶田叡一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造: その変容と多様

- 化 誠信書房
- 中野 収 1991 若者文化人類学 東京書籍
- 宮下一博 1995 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝(編) 講座生涯発達心理学 4 自己への問い直し：青年期 金子書房 Pp.155—184.
- 西平直喜 1973 青年心理学 塚田毅(シリーズ編) 現代心理学叢書 7 共立出版
- 西平直喜 1988 青年心理学研究の当面する課題 西平直喜・久世敏雄(編) 青年心理学ハンドブック 福村出版 Pp.3—42.
- 西平直喜 1990 成人になること：生育史心理学から 東京大学出版会
- 岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 16—121.
- 岡田 努 1993 現代の大学生における内省および「友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162—170.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354—363.
- Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. In J.Suls, & A.G.Greenwalt (ed.), *Psychological perspectives on the self*. vol.3 Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.107—136.
- 千石 保 1985 現代若者論：ポストモラトリウムへの摸索 弘文堂
- 菅原健介 1984 自己意識尺度 self-consciousness scale 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184—188.
- 託摩武俊・菅原健介・菅原ますみ 1989 羊たちの反乱：現代青少年の心のゆくえ 福武書店
- 高垣忠一郎 1988 自分をつくる 心理科学研究会(編) かたりあう青年心理学 青木書店 Pp.55—82.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21—28.
- 安田三郎・海野道郎 1977 社会統計学 改訂2版 丸善
- (1998.6.26 受稿, '99.5.15 受理)

Relation Between Perceived Friendship and Self-Consciousness Among Contemporary College Students

TSUTOMU OKADA (RIKKYO UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 1999, 47, 432—439

The purpose of the present study is to explore how adolescents perceive their friendships and the characteristics of contemporary adolescents. The following were examined: friendship, self-consciousness, and characteristics of contemporary adolescents. On the friendship scale, 3 indices were adopted: 1) the friendship that they currently have (current-self rating), 2) the friendship that they perceive to be ideal (ideal-self rating), 3) the friendship that they perceive their friends to have (friend rating). On the other scales, current-self rating and friend rating were adopted. The results showed that the ideal-self rating on “emotionally close friendship” and “crowd friendship” subscales in the friendship scale was higher than the current-self and the friend rating. Among high self-consciousness students, the current-self rating on the “emotionally close friendship” subscale correlated with the ideal-self rating. Unlike these adolescents, a correlation between current-self rating and friend rating was found among low self-consciousness students. The adolescents tended to perceive themselves as more self-conscious than their friends, and to show low scores on the “activeness” and “dependency on parents” subscales in the characteristics of contemporary adolescents scale.

Key Words: friendship, self-consciousness, contemporary adolescents